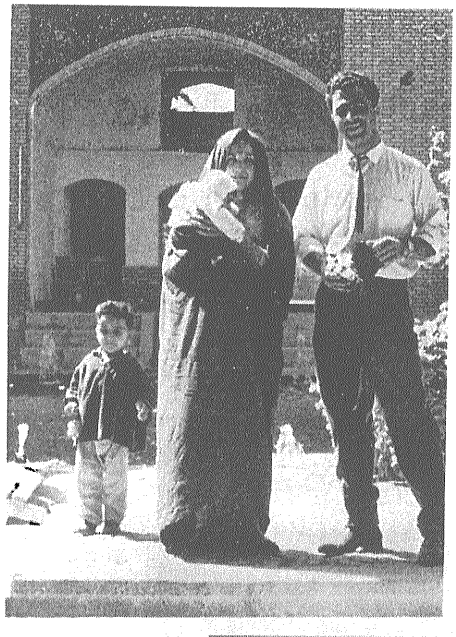
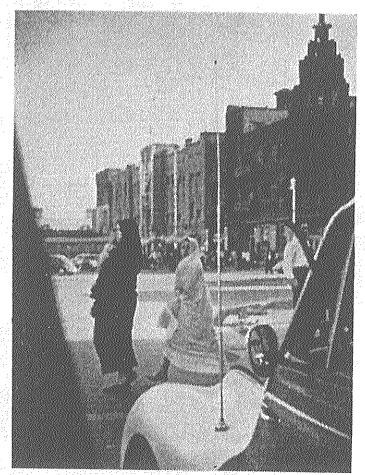
イランさまざま
③
チャドール

金子徹一

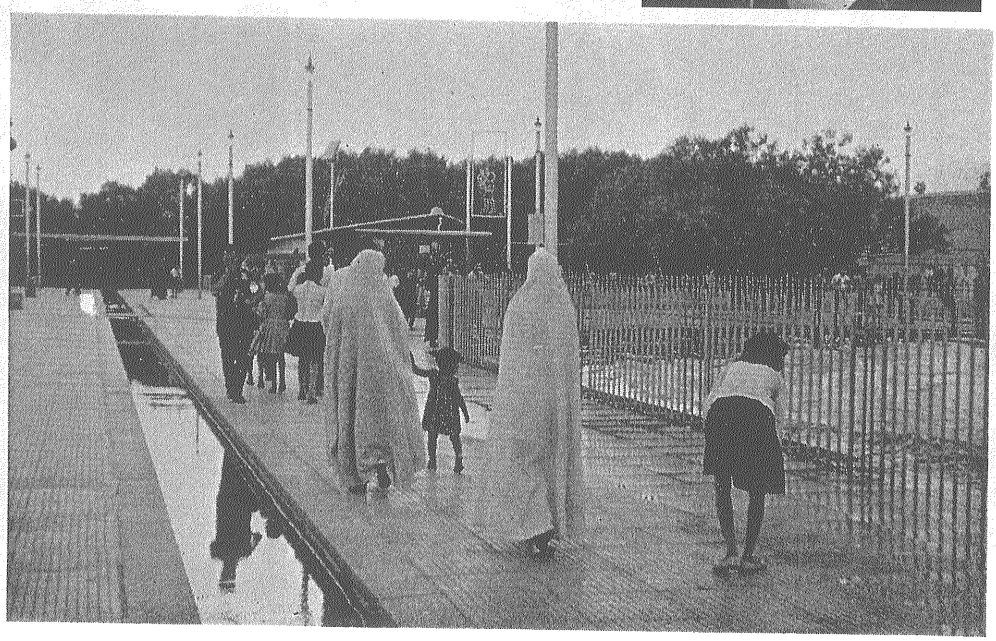
テヘランの女性の半分ぐらいチャドールをかぶっている．　チャドールというのは黒または白（白といっても純白でなく黒や色ものの小さい水玉模様がはいっている）薄手の衣（ころも）で頭からかぶっているものである．　アラビアで見るように覆面をしているわけではない．　いなかで　われわれ外人に会うと顔をそのきれで隠すようにする．　平安朝時代の女宮のしぐさに似て色っぽい．　テヘランの街でも南の下町に多く見られる．　もちろん役所に勤めている若い女性はこんなものは着ていないが　街ではけっこう若い人でもチャドールを付けている人に会う．　先帝の時代に男はセビロに　女はチャドールをぬげという法律が出されたそうだが今だに愛用されているところをみると何か理由があるのかもしれない．　女性は一般に保守的であるといった公式的のものより　これを付けると下に何を着ていてもかまわないので一種のぼろ隠しになるといった経済的理由かもしれない．　チャドールをかぶった婦人を写真にとってはいけないといわれている．　いけないといわれると　うつしたくなるもので　ひそかに写真機をしのばせて狙ったり　自動車の中から早どりしたりする日本人が多い．　しかし　テヘランでは　それほどのことはなさそうである．



旅行者の案内をしたラヂユーと氏とチャドールを付けた妹さんけん



街をゆく女性たち
（自動車の中から盗みどりをした）



テヘラン郊外の水源地を散歩する婦人

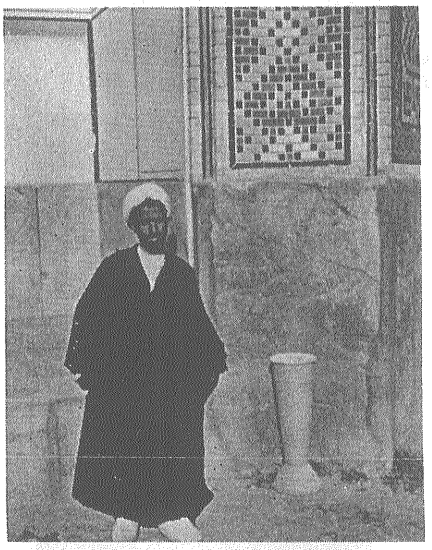
モ　ス　ク

回教のお寺のことをモスクと呼んでいる．　イランに回教がはいったのは紀元642年で　アラビア人は征服と共にイラン人の改宗を巧みな方法で行なった．　つまり回教になると経済的の利益があるとか立身出世ができるとかいった方法である．

今日イラン人は回教徒ではあるがアラビアなどと異なり分離派のシーア派の支派である12イマーム派に属するそうである．　これはアリーの直系12代のイマームを正統の後継者と認めたものである．

テヘランでもイソハンでも　名所の多くは回教寺院でちょうど京都の名所としてお寺めぐりをするようなものである．　一般のモスクは2本の塔とドームがあり　ドームや塔の多くは陶器のモザイク模様で飾られている．

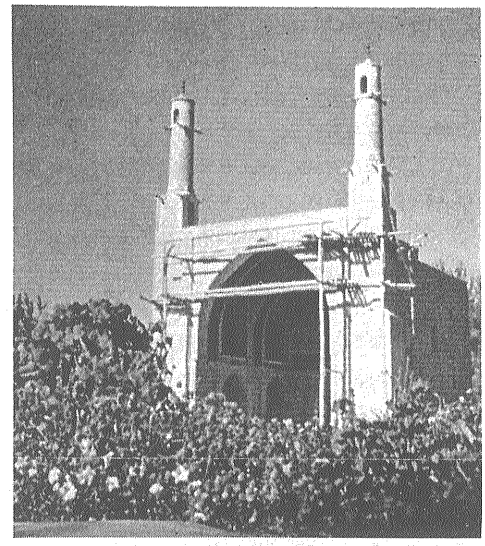
またアーチ形の構造が多くみられ　美術上　建築上面白いものだそうである．　先帝のレザー王の時代に司法権を回教の法官の手から奪ったり　その他かなりの改革が行なわれたので　他のアラビア国のように権力はないが　それでも土地などから相当の収入はあるらしく　クムのモスクその他大々的に改修工事をしているのを見た．　役所のインテリに聞くと回教などは信じていないというが　私たちと仏教との関係のようにそのまま受取ってよいかどうか判らない．

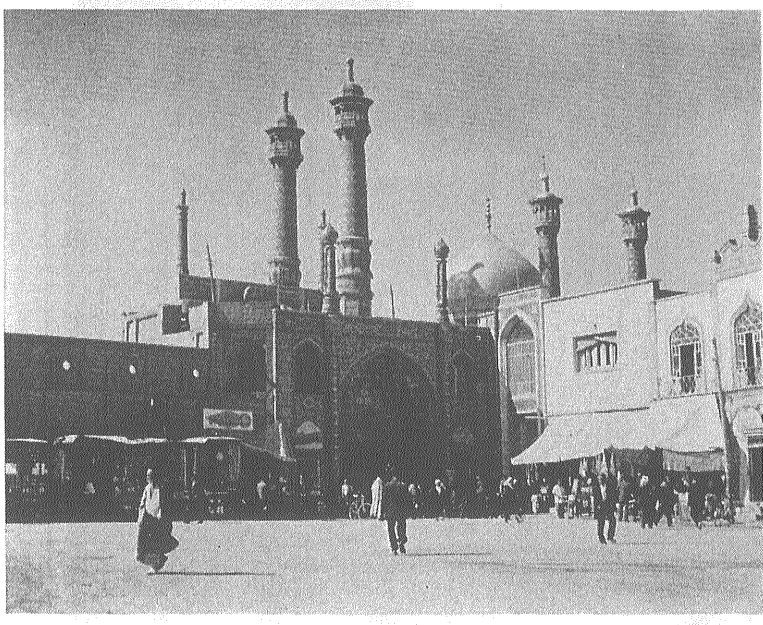


←回教の僧侶
コーランを研究して問答があるらしい　これはイソハンの寺院の僧であるが　奥の部屋で2名の僧か争いをしていたので尋ねると　問答をしているとのことであった

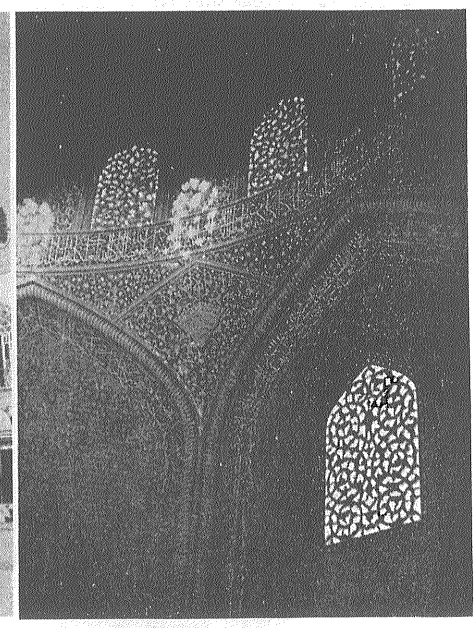
——・——

振動する塔　→
このモスクは有名な僧が約500年前に建てたもので片方の塔に人が登ってゆすると他の塔が動き出すので shaking tower と呼ばれている　共鳴の現象を考えれば別にふしぎではない





クムのモスク　みやげ物を売る店がならんでいる
むこうにみえるドームは目下改修中



上掲の振動する塔の内部のモザイク模様

カナート(Qanat)

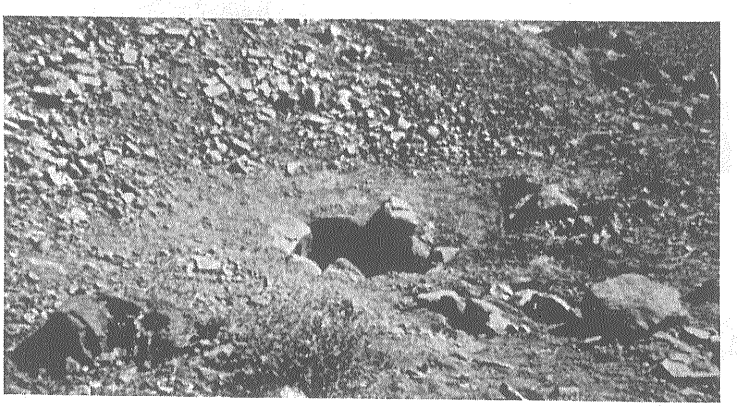
カスピ海沿岸を除きイランでは水は貴重な存在である．　冬から春にかけて降った雨水は山に浸みこみ　それが流れ出して山麓で伏流水になる．　これを見つけると　そこから数km　あるいは数10kmも　地下トンネルで部落まで引くわけである．

地上を流すと蒸発がひどいが地下を通すとその点はよろしい．　しかし　地下トンネルを掘るのはなかなかの工事で　20～30m毎に井戸を掘り　それから横坑を掘ってつなげて行く　したがって　飛行機から見ると1つの方向に延々と井戸が続いているのがよくわかる．　1つ1つの井戸は搬出した土が周囲につまれているので　小さな泥火山のような形をしている．　時々は水の流れが悪くなるので改修する必要があるそうである．

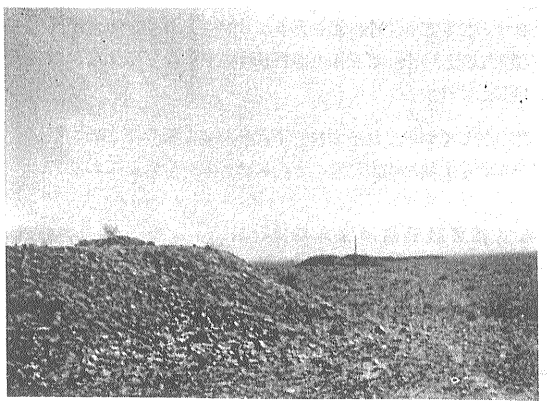
この技術は有史前からあったそうで　カナート掘りの技術者（といっても写真のように土工といった方がよいかもしれないが）はこの国では尊重されている．　今日の目から見れば大したことはないかもしれないが　この技術をはじめて考え出した人は　イラン人にとってはマホメット以上の人に当るかもしれない．

今では　この水路の多くは個人の所有になり　地主のほかに水主が居り　これから莫大な収入があるそうである．　イラン国の社会機構の上で考えるべきことかもしれない．

（筆者は　物理探査部　探査課長）



←
カナートの口



カナートの続いている様子を写真にとるのはむずかしい　というのは砂漠には高いところがないからである　飛行機からは点々として続いているのが見えるが　あまり小さくて写真ではうつせなかった

カナートの改修作業（テヘラン郊外にて）